
えっ！？ 俺勇者になっちゃった。

文野志暢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えつ！？ 僕勇者になっちゃった。

【ZPDF】

Z0488H

【作者名】

文野志暢

【あらすじ】

ある日、一人の保育士が物語の世界に迷い込んでしまつ。そこでは彼が見たものは…。

プロローグ（前書き）

童話の元ネタをいじつてみました。

プロローグ

やあ、こんばんは。

あつ、もしかしたら「おはよう」や「こんばんは」の人もいるのかな？

まあ、いいや。

皆さん初めまして。

ボクは…

『ボク』という存在ができる前に消えてしまった物の一つだよ。

あはは。

意味が解らないくて？

此処は物語の狭間。

物語つて書き手によつて、良くも悪くもなるみね。

で、その使わなかつたネタが落ちてるのがここ。

だつたら解るよね？

ボクはある物語の登場人物だつたけど使われなかつた存在。

この世界も面白いよ。
住めば都つて感じ。

だけどね、彼らことつては違うみたい。

彼らは誰かつて？

そりや内緒だよ。

でも、もひすぐ彼にまつておじひことが起りぬひこだ。

あつ、みんなが呼んでる。
行かなきや。

第1章

乙木^{オトギ} 皇^{コウ} と 姫島^{ヒメジマ} 玄^{ゲン}は 図書館で本を読んでいる。

しかし、彼らが読んでいるものは全て子ども向けの本であった。

若い男が一人でひたすら子ども向けの本を読んでいる光景は少々異様である。

一冊また一冊と二人は周りにある本を読んでいく。

半分ほど読めた時、玄は疲れてきた所為か、本を読むのを止め、体を動かし始めた。

それに気付いた皇は彼に言った。

「玄、悪いな突き合わせちまって。外の休憩所で休んできてもいいぞ」

元々この作業は皇一人で行うはずだったが、玄が手伝ってくれていたのだ。

「大丈夫だつて。さすがに三・四時間ぶつ続けて本を読んで目が痛いけど」

玄は体を動かしながら、さりげなく。

「しかし皇、子ども好きで幼稚園の先生になつたはいいけど大変だね」

皇は言った。

「まあな、子ども達の笑顔で疲れは吹っ飛ぶけど親が恐い」

「もしかしてテレビで騒がれているモンスターなんとかって奴？」

「そんなどこる…。この間も園児の父親におもいつきり睨まれた」

皇は明後日の方を見ながら言った。

それを聞いた玄はあることに気が付いた。

「なあ、その園児つてもしかして女の子？」

「ん? よくわかつたな」

皇は驚いたが、玄は先ほど気付いたあることが仮定から確信に変わった。

「そりや睨まれて当然なんじゃない？父親が娘に言つてもいいたい
言葉Ｚ。・�を奪つたんだから」

玄は笑いながら言つた。

「なんだよそれ」

皇は不機嫌そうに言つ。

玄は思つた。

（知らないのか「トイシ…。『大きくなつたらパパのお嫁さんになる
（ハート）』という言葉を。大方、父親はパパの部分が皇になつた
やつを聞かされたんだな）

玄はじつと皇をみつめていた。

皇は玄からくる視線が嫌だつたため、

「玄、いつまでボーッとしてるんだよ。わざと後半分読んじまつ
ぞ」

と言つた。

玄は笑いながら謝り、本を読み始めた。

二人が本を読んでいると蛍の光が聞こえてきた。
それは閉館のアナウンスだった。

外はいつの間にか薄暗くなつてあり、図書館には人が少なくなつていた。

「げっ！？もうこんな時間。玄そこの四番とこれ借りて出入口で待つてくれ」

慌てて皇はカードを玄に渡し、急いで本を戻しに行つた。

普段から静かな場所である図書館だが、時間が違うだけで周りの空気が不気味になつている。

(さつさと本を戻して、借りた本をまとめないと)

皇は急いで本を戻す。本は二十冊ほどあるが、子ども用の本などで戻す場所はそれ程離れていない。

皇は残り一冊の本を戻すために、本棚の周りを小走りしていた。

その時、反対側の本棚から小さな光が見えた。

皇は誰かが忘れた携帯電話だと思い、反対側の本棚に行つた。

しかし、光っていたものは別のものであった。

それは……。

本だった。

皇は声にならない叫びを上げ、本を持ったままカウンターまで全速力で走つていった。

いつの間にか持つて居る本は一冊になっていたが、皇は気が付いていない。

司書と話している玄は驚いた。
何故なら本を戻しに行つた友人が、ものすごい勢いでこちらに走つてくるのだから。

「すいません。これも追加で借りますー」

皇はカウンターに本をのせ玄からカードを奪つた。

早く図書館を後にしたい皇は、司書の事務的な対応を聞き流し、終わつたと同時に本を持って図書館を足早にでていった。

あまりの出来事にあぜんとしたが、玄は何故彼があんなにも慌てていたのか解らなかつた。
しかし借りた本の殆どを自分が持つて居るため皇を追い掛けるしかなかつた。

「待てよ……」

玄は必死に走ったのでなんとか皇に追いつくことができた。

「見てない、見てない……。俺は見てないんだ……」

皇は一人呟いている。

玄は心配になつて声をかけるが、反応がない。

「……。返事しきつて」

やつとのことで皇は玄に気が付いた。玄は皇に話を聞いくつさるが、

「家で話したいから、ウチ寄つて

と言われてしまった。

皇は血をついたら、先程の出来事を玄に話した。

「……。で、オマエは本が光っているのを見て、恐くなつて逃げて、その上余分な本まで借りてきたつてこと?」

と玄は言った。

皇は沈んでいる。

皇にとつては一大事、しかし玄にとつては作り話にしか聞こえない。

呆れ果てた玄は自宅に帰らうとする。その時、皇が何か言った。
「何か言つたか?」

聞こえなかつた玄は皇に聞き返すが何も言わない。
氣のせいかと思った玄は帰らうとするが皇がズボンの裾を離さない。

「……。」

両者無言の状態が続く。

しばらぐして、根負けした玄が

「わかった。手伝えばいいんだろ」

それを聞いた皇の顔がみるみる明るくなつた。

「よし、やうと決まれば早くこの六冊をまとめるが」

反対に

玄の顔は沈んでいたが…。

二人は早速作業に取り掛かる。するとふと玄は気がついた。

「借りたのは七冊だぞ」

確かに本は七冊ある。

「あれ？五冊玄に頼んで、俺が持っていたのは最後の一冊だけ借りたハズなんだけど…」

と皇は言った。
しかし玄が、

「何言つてゐるんだ。お前が持つてきたのは一冊だったぞ」と言つた。

よく見ると一冊だけ皇の見覚えのない本があつた。

タイトルは『おどぎの国の大事件』。

中を見てみるとおかしなことに、最初の一・二ページしか描いていない。

そして図書館の本ならば必ずある物がなかつた。

「コレ、バーコードがついていない」

皇はもぢりんのこと、私も本を調べた。

と、突然。持つていた本が宙に浮き光りだした。

一人は眩しい光によつて前が見えない。

「どうなつてゐるんだ！？」

「ギャー。『メンナサイ、ゴルシテクダサイ……』

それぞれの反応を見せる二人。

「勇者さまへ」

二人以外の声と同時に光はなくなつたが、その代わり少年らしきモノがいた。

本は彼の手元にある。

彼の背丈や服装は子供だが、耳の先が尖つて背中には羽がある。
尚且つ頭の上にはつわざの耳と触覚が生えていた。

「誰だオマエ

玄が聞く。

因みに皇は、キッチンの奥に隠れている。

頭だけだが……。

「僕はエリュって言つの。勇者さまを迎えて来たの」

少年 エリュが答える。

「勇者って誰だ。そんなヤツ今時いないぞ」

尤もなことを呟つづ。

「えへ、セーヒーのよ。ね、勇者とも」

ヒリュが指したのは皇だった。
私はしばりく考えたが、

「皇、呼び出しだ。行つて来い」

とじあえず、隠れている皇を引っ張り出した。

ヒリュは持つている鞄から熊の耳を出し、ウサギの耳と取り替え、
でてきた皇を持ち上げた。

「さあ、勇者さま行きますよ」

皇は気付いたが時既に遅し。

自分より小さいヒリュに持ち上げられ、本の中へ連れて行かれる
寸前だ。

「えー？ 説明無いの？ ってか、拒否権も無いのー！？」

皇は慌てて玄に捕まろうとするが、

「行つてらっしゃい。 勇者ナマ」

笑いながら避けられた。

次の瞬間、本は亜空間を開き、エリュと皇は吸い込まれていった。

そこには散らかった部屋と玄だけが残る。

「まあ、がんばれよ」

玄は一人つぶやいた。

第1章（後書き）

2ヶ月以上かかつてしまつた。
これからどうなるのだろうか…

第2章

本に入ったエリュと皇。

しかし、一人の周りは暗闇で何も見えない。

皇は未だにエリュに持ち上げられたままだ。

エリュは触角から光を放ち周りを明るく照らす。

(畜生、オレはまだなるんだよ)

皇は無理やり連れてこられたため機嫌が悪い。

そんなことを余所にエリュは進んで行く。

しばらく歩くと扉が見えてきた。

たが、ゲームやマンガとは違ひ扉といつよりは普通のドアだ。

エリュは扉の前で皇を降ろした。

「着きましたあ。ココが世界の入口でーす」

「どこからどう見ても人んちの玄関なんだけど

疑問に思つ皇。

「いいの、いいの。わあ、勇者さまが思つ様に扉を開けて」

とヒリュは答えた。

とつあえず、皇はヒリュの言つ通り扉を開けた。

扉を開けると、

立派な城下町があつた。

「え？」

唚然とする皇。

ヒリュはスキップをしながら進んで行く。
しばらくして皇を置いてきてることに気が付く、

「勇者さまへ早く早く
と詰つた。

皇は慌ててエリュに追いかけた。

皇は街中を歩いていると改めて自分のいる場所が異世界だと認識した。

お菓子でできた建物。高速で走る亀とゆっくり走るハリケネのおい駆けっこ。

ソファが動物の様に走っていたり、妖精がそこかしらに翔んでいたりする。

もちろん、城下町なので日本髪を結っている女性やおかっぴきもいる。

彼らの場合、目が一つだつたり、首が伸びたりしているが。

皇は前を見ずに歩いていたため何度も住人とぶつかっていた。

ぶつかった住人は皆、絵本でみた登場人物だ。

エリュは皇が目移りしてあっちへふらふら、こっちへふらふらいろいろなところへ行ってしまうので、仕方なく担いで城まで行くことにした。

エリュと皇はやつとの「」とで城に着いた。

城下町に建つて いる城のだが、目の前にあるのは天守閣が立派な日本風のものではなく、遊園地にある西洋風のものだつた。

城にはアリスに出てくるトランプ兵、くるみ割り人形を大きくしたもの、猫や犬などの動物が見回りをしている。

彼らは皆すれ違つエリュに挨拶をして いる。

(「マイツって実はものすゞいヤツなのか?」)

と、疑問に思つ皇。

そんなこんなでいつの間にか、一人は大きな扉の前まできた。

エリュは一度扉の前で立ち止まり、

「」の先に我が童話の国の王様がいますので、勇者をまへ粗相の

なこよつお願いしますねえ～

と言われてしまつたので、皇はもちろん頷いた。

皇は内心とても緊張していた。なんせ、本の中とはいえ、今から一国の王に会つのだから緊張しない筈がない。

エリコは扉を一度叩き、

「王様、神官エリコ、外の世界より勇者を連れ只今帰還しました。」
と言つた。

皇は王様に会つ緊張とエリコの役職に驚いた気持ちが交差していった。

そして、慌てる皇を余所に田の前の扉は開いていく。

奥には、それはそれはとても美しい少年がいた。

少年はどこか儂く、優しさのオーラに包まれている。

「エリコ様。ある一人共にさりまで来て下さる。」

ヒト様は言った。

皇はまともな人だと判断して前へ進んだ。

しかしエリュは

「王様変ですよお～。そのしゃべり方～」

と、大爆笑。

皇は神官といえどそんな口調で話していいのだらつか慌てる。

「エリュのことは気にせず勇者殿、どうぞいらっしゃいへ

王様はエリュを相手にせず皇に話しかけるが、エリュの笑い声が部屋に響く。

「お、おい。いいのか、そんなに笑って」

皇はエリュのことが心配になり、声をかける。

「え～。だつてえ王様が悪いんですよお～。

普段そんな話し方しないのにい～。部屋入った瞬間びっくりしちゃつたあ。だつてホントは超…」

エリュが最後の言葉をいい終わるか終わらないかのところで、エリュに向かつて何かが飛んでくる。

それを軽々と避け、

「俺様なんですよお～」

と言つた。

「あ、何言つてやがるー。」

(王様キレました。つてか、ギャップありすぎだ。あんなに可愛いのに俺様…)

皇は一人ギャップに苦しんでいた。

何故ならエリュと王様は激しい攻防を繰り広げていたからだ。

二人は城を壊す勢いで闘つているが城はびくともしない。

大変なのは唯一人で二人の闘いから逃げている皇だった。

「あの、すみません」

おそるおそる、闘つている二人に声をかける。

やはり返つてくるのは返事でなく、闘いの流れ弾ばかり。

それらを必死に避けながら声をかけていく。

「あーん」

やつとのことで王様が返事をした。

その時には、皇は疲れ果てていた。

「勇者さま。どうしてそんなにボロボロなんですか？」

とHリコは聞いてきた。

王様は皇が闘いに巻き込まれたのがわかつてるので、何も言わず魔法で皇の洋服や身体を治した。

「っこでこ、コレもだ」

皇の頭を持つて王様は言った。

皇の頭の中には小さな電流が走り、思わず目を閉じてしまつ。

それをみたHリコが王様に文句を言つたが、王様は言わせない。

皇は目を開けると、あまりの光景に驚く。

「えつ、王様。俺の目に何をしたんですか！？」

「あーん？ ただテメエの見ているものが幻だから回線いじった」

と王様は言った。

ヒリュは皇の身に何が起きているかわからない。

「王様、勇者さまに何したんですか！－勇者さま、大丈夫ですか
あ？」

「うう、ちょっと気持ち悪いけど大丈夫だから。

今まで見ていた景色と全く違うから驚いた。それで俺は何をすればいいんですか？」

と皇は言った。

王様はやっと今の皇の状態を理解した。

「通りで幻の景色を見てたわけか。つたぐ、説明無しに連れてくる
じゃねえよ」「

ヒリュはまだ疑問が残っている。

「え～。だつて勇者さまを見つけたらすぐ連れてこいつて王様が言つたじやないですかあ～」

文句を言つヒリュ。

王様は呆れながら言つ。

「神官であるお前がなぜわからない。」
「お前はあまりにも世界が違う。

だからあまり影響を受けない、お前に勇者を迎えて行かせた。
だが勇者は違う。多かれ少なかれ、影響がでてくるんだ。」

ヒリュは納得し、皇に謝つた。

皇は自分に起きていた事がなんとなくわかつたが、疑問が残る。

「じゃあ、俺が今まで見ていた景色はなんですか？」

皇は聞いてみた。

「あれは、勇者さまの頭の中で想像した世界だよ。」

とヒリュが言った。

その言葉を聞いた皇は、沈んでしまった。

(なんつーもんを想像してんだよ、俺)

「要は、変なもん見えてると夢見すぎただとこのがわかるな」とH様は皇に追い討ちをかける。

「だが、それだけで済んだつてことは、勇者になる素質はあるからな」

と王様は続けた。

皇は不安になつたので聞いてみた。

「じゃあ、視覚だけでは済まない場合って…」

「一番危ないのは狂っちゃう」とですかねえ～

皇が最後まで言い終わる前にエリュが答えた。

「エリュ、お前ちょっと落ち着け。勇者、本題入るからちゃんと聞いてていい。

「エリュ、お前ちょっと落ち着け。勇者、本題入るからちゃんと聞け」

とH様は言った。

一人は落ち着いて王様の話を聞くことにした。

「勇者、お前からみてこの世界は本の中だ。本といつても童話の国だがな。

俺様はこの世界の王でエリュは神官だ。

この国の住人は様々な童話や絵本の登場人物になるんが、最近不思議なことが起きるようになつた」

「不思議なことは？」

皇は質問した。

「ああ。元々童話の国の住人とは別に存在していた住人が国で暴れているんだ。本来ならエリュ一人でどうにかなるんだが、この世界の掟で『世界に異変が起きた時、異世界から勇者を呼びこの世界を救つて頂く』という面倒なもんが存在してな。つづり訳でお前が呼びだされたつてわけだ」

と王様が言った。

「は、はあ~」

皇は、あまりの話に相槌を打つだけになつてしまつた。

「大丈夫ですよ。僕も着いていきますから

とエリュは言った。

皇はじっくり考えた後

「わかりました。その話お受けします」

と言つた。

Hリュは

「それでは早速準備してきますねえ～」

と慌てて王室を出ていく。

皇は思つて出したよつてH様に聞いた。

「一つお聞きしたいんですが、初めて会つた際に何故あのよつな口調だつたんですか？」

「ああ？あれはただの外面だが、Hリュが知らないのは本来出席する筈の公務をサボつているからだ」

とH様は言つた。

「……なるほど」

皇はエリュが王様にかなり迷惑をかけているのがわかつた。

皇は王様にこの世界の事を聞いていたら、エリュが戻ってきた。

「只今戻りましたあ～。準備は整いましたよう」

「「」苦労エリュ。今日は陽も暮れているから明日の朝出発すればいい」

と王様は言った。

「えつ、俺明日も仕事あるんだけど」

と皇は慌てて言った。

「「」ひつらとあちらの流れは違うから大丈夫だ」

と王様は言へ、せつきの話を聞いていなかつたなど皇を睨んだ。

皇は王様に謝り、客間に案内された。

皇が城に入る時丁度城内に不振な影が忍び寄る。

「まあ、なんと、なんと。勇者なんぞを喚びだして、急いで忌々しい小娘[...]」

と、突然、不振な影が履いている靴が光りだす。

「あつ、熱い熱い。や、止めておくれ。急いで伝えにいかねばあ～」

影の靴は熱せられたのか、とても熱い。
影はブラックホールのようなものをだし、中へ入つていった。

第2章（後書き）

第2章書けました。

王様あんな性格ではなかつたんですが、ものすごいことになります。

果たして最後に出てきたのは誰でしょう？

第3章

チュンチュン、
チュンチュンチュン。

皇は外の眩しい光によつて目が覚める。
ただ実際のところ田は開いてはいるが、頭は回っていない。

T₁, T₂, T₃, T₄

部屋の外から間の謎の音が聞こえてきた。

と、皇の部屋のドアが勢いよく開く。

「櫻痴が死ぬ〜桜せぬ〜」などと云ふ。」

部屋に来たのはエリュだ。

「おはよー。朝から元気だな」

皇は田をじすりながら挨拶をする。

皇は昨日のうちに準備された服に着替えようとする。

一ノナギ

エリコは顔を伏せて部屋を出ていく。

皇は少し疑問に思つたが服を着替えた。

皇は着替えて部屋を出たところにエリュはいた。

「何で出て行つたんだ？」

皇はエリュに聞いたが答えなかつた。
皇もまあいいかと思い、深く追求せず一人は王室へと向かつた。
王室へ行く間に幾人かの家臣とも会つたが、昨日の様には驚かな
かつた。

王室につくと王様は玉座に座つていた。

「おう、テメエら早速だが行つて来い」

「ところで、どこに問題の住民がいるんですか？」
と皇は尋ねた。

「あ？ 適当に歩いていれば会えるだろ。
だからとつと行け」

皇とエリュは王様が言つた途端に突風に襲われ、
城の外まで飛ばされた。

『言ひ忘れたが右目を隠すと偽りの姿が見える。
エリコなら殆どの敵は一人で倒せるから、
問題のやつらがでてきても下手に手を出すんじゃねえぞ』

と、王様の声が頭の中に響いた。

「わひと、氣を取り直して出発するか」

と、皇は言ひて一人は出発した。

二人は周囲に聞き込みをしながら進んでいるが、
手がかりは手に入らない。

(問題の奴ら探さないとつとこの本から出られないんだよな…)

皇は手がかりが見つからないので不安だった。

「あ、勇者さま危ないですよ」

皇はエリュに押されてこけてしまつ。

「つ危ねえな。なんだよこれ！？」

皇のいた場所には大きな亀裂があつた。

「お主等があの方を狙う悪い奴等だな？
この坂田金時様が退治してやる！…」

二人の前には坂田金時と名乗る斧を持った男が立っていた。

金時はもう一度斧を振り下ろし攻撃してくる。
エリュは簡単に避けれるが皇はそもそもいかない。
やはり三回に一回は攻撃をくらうようになる。
危ないと判断しエリュは皇を連れて岩の陰に隠れる。

「なあ、あれが問題の奴なのか？」

と皇は聞いた。

「アレは違いますよう）。あれは只の影が薄い主人公です」
「はあ！？何の話？」

皇は金時が何の登場人物か解らず驚いた。

皇が考えているのをみていた金時が痺れをきらした。

「ああ、どうせ俺は影が薄いよ。ああ薄いさ。

勇者の癖に俺のことが解らないのか！？

歌だつてあるんだぞ！

つか、俺は歴史上の人物でもあるぞ！

他の奴らと一緒にするんじゃねえ！」

金時は叫びながら、二人に攻撃をする。その攻撃により道にたくさんの亀裂ができる。

(あ～めんどくせえ)

ふと避けながら皇は考えていた。

すると

「ていやつー」

エリュが金時に石を投げていた。

そして皇に向かつて言つ。

「あんまり話長いんでえ、厭きちゃいましたあ

皇はエリュにお礼を言つて二人は先へ進んだ。

(『あの方』って誰だ?この件のラスボスだよな。手がかりが少ね

え…)

皇は考えていた。金時についても謎が多くあるが、一刻も早くこの事件の犯人が知りたかった。

「なあ、金時が言つていた『の方』って心当たりあるか?」

皇はこの世界のことはエリュが詳しいだらうと思つて聞いた。

「……解らないです」

「そつか」

エリュもわからない相手とわかつた皇はまた考へ込んでしまつた。

(彼らにて言葉にしたら存在を認めることになるから言えないのです。)メンナサイ)

皇はエリュがこんなことを考へているとは思つてないだろう。

「」

二人の後ろから地響きが聞こえてきた。

「何なんだ！？」

見てみると岩が皇とエリュに向かっている。

「どうああああああ！」

なんと岩の後ろには金時がいた。

「よくも無視してくれたなあ！！」

岩を押しながら金時が叫び一人に向かっている。
しかし、皇とエリュは道の端に寄つた。

ガッシューン

金時はそのまま木にぶつかる。

「なんだつたんだ？」

皇は呆れている。

「さ、流石は勇者と神官だな…。ならば一本勝負の相撲で決着をつけるか」

「僕を倒せませんよう。ベー

エリュはやる気だ。

「ハッ！…勝負は決まつたも同然だ。」

金時は相撲に自信があるみたいだ。

エリュは熊耳カチューシャをつけて準備している。

(エリュは大丈夫だな。あれ？金時…相撲…？)

皇は少し気になっていた。

一方エリュと金時は相撲を始めていた。

両者一歩も譲らない。

そこへ金時が技をかけてきた。

エリュは転けそうになるがこらえて技をだす。

金時はそのまま投げ飛ばされ空へと消えていった。

「どうやああ

「飛ばしそうがちやこましたあ」

「ありがとな」

勝負はエリュの勝利で終わった。

二人はまた先へと進んでいく。

「あつ、坂田金時つて金太郎かあ」

皇は思ひ出せたことにホッとする。

「やっぱり影が薄い主役ですか」

エリュは笑っていた。

「た、助けて～」

前から誰かが走ってきた。

第3章（後書き）

第一の敵は「金太郎」でした。

ずっと前に某番組で落ちまで知ってる人が少ないってやってたので、最初から彼が出でくるのは決まってました（笑）

次回は美食家＆死体愛好家と対決！！
でなんの話かわかつた人すごいかも
(2作品です)

第4章

逃げてきたのは一人の男性と二人の少年だった。
一番小さい少年が勢い余つて皇とぶつかってしまった。

「うわ！」

皇は少年と一緒に倒れてしまつ。

「「めんなさい！！」

少年は謝つた。

皇は大丈夫と言つたが、少年を見て驚いた。

「どうしたんですかあ～？勇者さま？」

エリュが尋ねる。

「なんでもない」

（つてえ……。右目閉じるんじゃなかつた。やっぱ目の前に幼稚園児が豚のお面つけてるから驚いちまう）

「で、何があつたんだ？」

と皇が聞き直し、男性は言つた。

「オレ達は、『三田の子ぶた』の子ぶたとオオカミです。先日、三男とそつくりな少年が現れオレらを襲ってきたのです。その為三人を守りに来ました」

少年 子ぶたは三人で寄り添っていた。

「兄ちゃんハラ減ったよ」

一番小さい少年が言い出した。

「我慢しろ。皆お腹は空いでる」

「でも兄貴、オイラもお腹空いた」

一番上の少年が注意するが、一番田の少年も空腹に耐えれないようだ。

ぐうう。

と誰かのお腹が鳴つた。

「兄ちゃんのお腹鳴つたよ」
と弟が笑っている。

皇は荷物から餌を四つだし、四人に渡した。

餌を貰つた一番田と二番田の子ぶたはとても喜んだ。
だが、三番田の子ぶたはまだ足りないみたいだ。

「どうした？ 餌ならまだ沢山あるだろ？」

と、皇が言ひ。

しかし二番田の子ぶたは首を振つた。

「ううん、餌一ひとつ足りないからね、僕が食べたいのは……」

突如、子ぶたの手には、身丈程あるナイフとフォークが現れた。

「何時の間に！？」

オオカミは驚き、子ぶたは隠れる。

「兄ちゃん達みーんなだから」

と、二番田の子ぶたが言つたと同時に皇達は逃げていく。

皇とヒリュ、それにオオカミと『凶の子ぶたはなんとか』『畠田に子ぶたに』をつくり少年から逃げる』ことができた。

「おひちやさん、三駄せんじくへ行つてしまつたんだ?」

と『畠田の子ぶたがオオカミに聞いた』

「わからんねえ。無事だといいんだが……。ヒリュ様お願いです、助けて下さー」

オオカミは言つたが、ヒリュは黙つている。

しげらぐして皇はヒリュに向ひ。

「なあヒリュ、この事件が俺達が探している手がかりに繋がると思つ。」

(『凶の子ぶた』とあの少年。繋がるものか……あれ?)

皇はふと氣になつた。

「せつあぶつかつたのはどうしただ?」

皇は聞いた。

少年は不思議そうに言った。

「何言つてゐるの? ぶつかつたのはアイツだよー。」

「あつ、悪いな

と皇は言つた。

皇はまだ疑問が残るようだつた。

しかし、他の皆は気付いていなかつた。
それよりも三男を探す方法を考えていた。

「おお、貴方は! -!」

そこへ一人の青年がやつてきた。

彼の服装は王子のようなものだつた。

そして彼は皇のもとまで行き跪いた。

「おお、貴方は何故そんなにも美しいのだ? 是非とも我が城に招待
しよう!」

ヒリュは王子らしき人と皇の間に入り、

「貴様は誰だ…?どの物語の王子だ?」

と、聞いた。

それを見たオオカミと子ぶたは驚く。

エリュは神官だ。見たことない住人はいる筈がなかつた。

皇は先ほどの少年と王子には同じような感覚に気が付く。

「ダメええええええ」

と、誰かの声が響く。

「王子様ダメですよ。兄ちゃん達は僕の獲物ですよ」

それは先ほどの少年だった。

皇達は少年と王子に挟まれてしまつ。

「一人位いいじゃないか。彼は是非とも我がコレクションに加えた
い

と王子は皇を指差したが、少年は首を振つた。

「最初に見つけたのは僕ですなので、全て僕の取り分です…!」

少年の言葉を聞き、オオカミと子ぶたは法える。
しかし、エリュと皇は考えていた。

「お前は欲張りすぎだ。我が一人貰つてもお前には四人いるだろ？
さあ我が城へと行きましょう」

王子は皇の手を取り行こうとした。

「ま、待て」

「勇者さまを離せ！――」

「王子様、だからソレは僕の獲物！――」

皇、エリュ、少年はそれぞれの反応を見せた。

「なあ、待て。俺はお前に連れていかれたらどうなるんだ？」

皇は慌てて王子に聞く。

「我がコレクションの一つとして城に飾つておくぞ」

王子はさも当然のように答えていたが、少年は不満そうにして王子を蹴つた。

「イタつ……」

王子は少年を睨む。

今度は王子が少年を蹴つた。

「痛い！――」

両者共に睨み合い、暫くすると一人は皇達の事を忘れケンカをし始めた。

「今です！逃げますよー！」

とエリュが言い、皇達はその場を離れた。

五人がその場を離れてから随分と時間が経った時、

「あっ！兄ちゃん達がいない！！」

と少年が気付いた。

「何!? ホントだ。貴様の所為で彼らを見失ったではないか」

「そつちこやー！僕の獲物だったんですよ

「こうなつたら、先に見つけた者の取り分だー！」

そして少年と王子は去つていった。

一方皇達は王子と少年から逃げ切り、レンガの家に隠れていた。

「エリューにいればひとまず安全です」

とオオカミが言った。

「臣の子ぶたはエリューと皇にお茶を出している。

「エリュー、やつきの一人こそ今回の敵になるんだろう。じつやつて倒すんだ?」

と皇は聞いた。

「はい、倒す方法なんですが……」

エリューは言葉を濁す。

「どうやるんだ?」

皇がもう一度聞いた。

暫く沈黙が続く。

かなりの時間が経つた後エリューは重い口を開いた。

「まず、彼らについてなんですが、僕の口からは言えないをです」

その言葉によつて皇達は驚いた。

エリュは話を続ける。

「理由は、こちらの住人が奴らについて話したことで奴らのことを認める事になります。奴らは本来ならばこの世界においてはいけない存在なので、存在を認める事によつて奴らは強くなつてしまつのです」

と言つた。

「じゃあ、倒す方法はないんですか?」

とオオカミが言つ。

それに続いと子ぶたは弟が無事なのかと聞いた。
エリュは自信が無さそうに続ける。

「奴らを倒す つまり元いた場所に戻す方法が一つだけあります。
その方法は『彼らの名前を異世界の勇者が叫ぶこと』だそうです
皆無言になる。

エリュ達は王子と少年の正体が解つても皇に伝える事ができない
為とても辛い位置にいた。
しかし皇だけは違う。

「大丈夫かもしれない」

エリュ達は皇を見る。

「俺、あの一人の正体分かったと思つ。只、万が一奴らの名を間違えた場合はどうなるんだ?」

と皇は言った。

しかし、エリュはわからないと伝えた。

ドンドンドン

誰かが家に訪ねてきたようだ。

皆に緊張が走る。オオカミは皇とエリュに確認し平然を装い、「どちら様ですか?」と言つた。

だが、外の人物からの返事はない。

皇は周りを確認しドアを開けたが誰もいなかつたのでドアを閉めた。

まだ皇達の緊張の糸が途切れない。

コトツ

天上から埃が少しづつ落ちてきた。

「もしかして!.. みんな逃げて!..」

長男の子ぶたが叫んだ。

皇とヒコも同じように気付き、オオカミ達を先導する。

注意深くドアを開け、皇達は外に出た。

すると

「やつぱりいたんだ」

田の前には先程の少年がいた。

バタン

誰も居ない筈の家からドアの開く音がした。

「貴様！約束が違うではないか！！」

家から出てきたのは煤塗れの王子だった。

「王子様誘導ありがとうございます」

と少年は嬉しそうに言った。

しかし、王子は少年を睨んでいた。

少年と王子が言い争っている間、皇達は小声で話していた。

「なあヒコ。こいつアイツの名を呼べばいいんだ？」

「勇者様すみません。古文書には『名を呼ぶ』ことしか書いてなかつたんです」

とヒリュが残念そうに言った。

皇は大丈夫だと言ひ。

（しかし困ったな……。ヒリュ達に聞く事は相手を強くする。それにヒントを『』える事もお互いに無理か。しそうがない、やってみるか……）

皇はヒリュ達に離れておくよつこと伝え一人王子達の傍まで行き叫んだ。

「三臣の子ぶたの三男……」

ピタツ

皇が叫んだと同時に少年は動きが止まつた。

「なんと、彼の名を知つていましたか」

王子は驚いた。

もちろん、子ぶたとオオカミも驚いている。

少年の周りを見ると黒い沼が出来、少年は沼に沈んでいった。

「王子も『』までですね」

と、突然現れた背の低い髪を伸ばしている男がいた。

「……？何故貴様が『』ここにいる？」

王子は言つた。

「『』のままですと、貴方まで使えなくなつてしまつので迎えに参り

ました「

と男は言ひ。そのまま彼は王子の耳元で何かを伝えた。

「致し方ないな、この決着はお預けだ」

王子と男は先程少年が沈んだ沼のよつたモノを出し去つていった。

その状況に皇達は無言になる。

「……だよ」

誰かがが呟いた為、皆そちらを見る。

「……弟はどうなったんだよ……」

泣きながら長男の子ぶたは叫んだ。

次男の子ぶたは泣いていて、オオカミやエリコ、皇は俯いている。

「……この決着さえついたらまた戻つてくれるさ。だから家で待つて
いよう」

オオカミが言った。

子ぶたとオオカミは家に帰つて行つた。

「皇とエリュはまだ出発しない。

「あの少年は解りやすかつたとはいえ、勇者様すごいですう。」
とエリュは言った。

「まあな、あの子が出てくる本も知つてたから。おかげで正体は解らなくとも共通点は見つけられたから次の相手がきても大丈夫だ」
皇の言葉を聞き、エリュも安心している。

そして二人は道を進んだ。

第4章（後書き）

お久しぶりです。

難産でした（泣）

時がたちすぎてキャラの性格忘れかけたし…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0488h/>

えっ！？ 僕勇者になっちゃった。

2010年10月26日07時48分発行